本朝

醉菩提

妻淺編 三のまき

13
3047
3

特
へ13
3047
3

稲妻表紙後編本朝醉菩提卷之二

東武　山東京傳　譯

第二　得失譬喩品

迦諾迦伐蹉尊者

去る程ゝ香晒ゞ孝心を天も感應ありけるにや。父洞九郎おもさ罪科を
逃ぬかれて家ゝ帰り名ハ。香晒かぐろなく喜び笄を代かゝ酒者をもてめ
来りていとひの酒をすめけるに。彦惣も病床を出て洞九郎ゝ向ひ誠是
香晒ゞ孝行の功徳によりて此喜ひあり。子ども陳ふかおゆへたまひそ。
もん身の罪を貴ひる金ゝつさてハ。様くの難義色くの愁嘆ありて。むかハ
ちでろさハ今もかゆやまぢ。ケ様くの支のあり〳〵とて其始終を細ゝ語ゝ。
其落さるゝハ香晒語り加へてぞせる。洞九郎ハ日来恩も情もうれまくざ。
者あれども。さそゞゆ命を救ハ也〳〵が嬉〳〵さに二人に厚く礼をの酒

呑てゞ居さうろう。時ゝ彦惣いひるい。わん身此度の支ゝ懲て此のちい露むさうも悪支をさてゐ〳〵こゝろれ。あにらうる慶ゝい王法あり。てん所うハ天罰あり。隠悪といへどもわ〳〵まざるさうふゆなし。今こゝ猶戸の業をもやめ。別ゝ活業とかえゐへ。年ひさし〳〵仕馴さゐい〳〵ゆとハいひあゞ〳〵。年者ての殺生好むべき業にわゝど。少しい後世の支をも願ゆくとくべ香晒そ其詞の尾につき。彦惣ゞあゝいうろ事を寺開ゝはゆゆゆゆ。此後いようゆゆの支を能慎をゆゝ。妾も漸〳〵ゝ賤の手業を仕おゞえてんゞたとく父活業をさてまゝどとも。妾安産して身軽ゝさゝゝありてゞゞゞいにもして養まゆゝゝゞ。彦惣どゞゝも病さゝ本復わゝゞ。能思案もわりぬゞ〳〵。[illegible]貪さをさのびゆゝ直道をさゝゆきさゞゞゞゞ神仏の恵もありなん。物食ゞゞも居べゝゞどかゞいひて諫ゝんゞ。洞九郎ゝうさゐ二人ゝいふゞゝ。此のちゝそ

殺生をやめ。何ゝもわゝ活業をゆめべ〳〵。ゝうゝいあれさる體ゝうゝゞ安閑とゝうしてハゞいつて身ゝうち痛て堪ゞ〳〵ゝとゝふにゞ。香晒ハ打笑志の歪ゝをこゝハかゝゝ〳〵かと心裏ゝ喜びつゝ哭ゝうゝ夫の病本復と我身の安[illegible]ゝゝのゝと少〳〵ハ心を安めゝう。わゝて後ハ洞九郎活業をせゞ。唯家ゝわゝて寝つ起つ。短日をも暮〳〵か祇叭のゝして居さうるゞ。一日香晒いひるハ父ゝう殺生をやめゆゝハ狩大も用ゆゝにあのゝう。殊更食物もゝゝゝれゞ。何方にもわれ人家多く食ゝ〳〵ゝざる慮を見立て放ちゝりゝゝ〳〵。ゝこれもゝて飢ゝゝるハ不便のゝにいとゝうゝゞ。洞九郎打ゝかゞゝき。ゝうにもゝうゝ。我〳〵をゝうゝゝやゝうゝゞの貪ゝうゝ畜生ゝゝゝゝゝ食を減ゝうゝハ无益のゝうゝゝとゝいひて。四五疋飼ゝにゝうる狩犬ゞゝの網をひゝ。狩杖つゝさて出ゝるゞ。道ゝゝゝちひゝるハ。此犬ゞゝも猛ゝくゝゝ常ゝ獣ゝ肉を食ゝ馴れゞ若人家ゝる所ゝ放ちゝゞゞ人に齧付かゞゝてゝうひゝゝ災を我家ゝゝゝゞ。

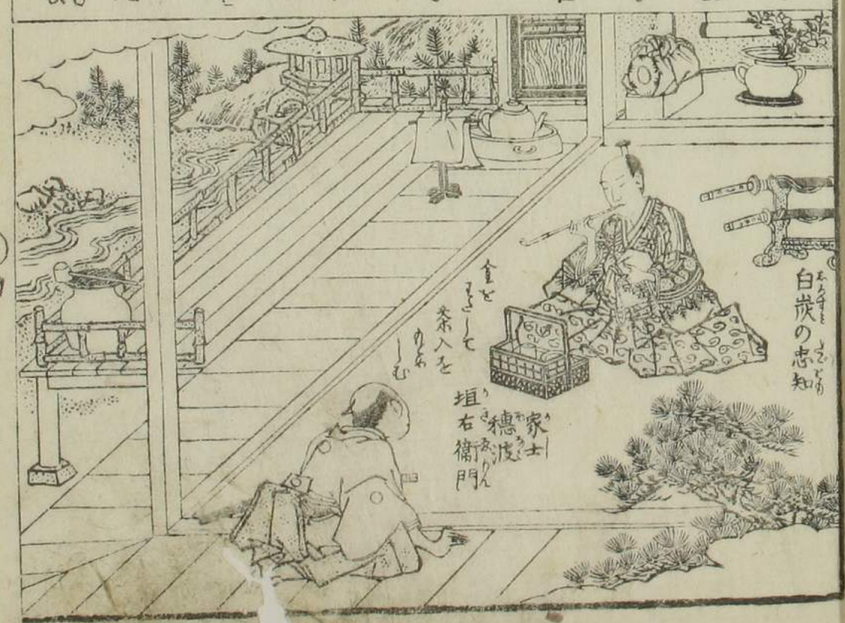
我此ごろ活業をせざれバ。ひさしく酒の匂だに嗅ず。此犬をむかしく放んよりも。殺て穢多に売つかへさバ少しの酒代にもなるべし。禍の種を蒔んよりハ酒にかゆるにしくべからずと情気なれ日来の悪意を発し。道をかへて河原の方へひさげゆけるに犬ども其心を察しけるにや。後歩して前にすゝまざるを。狩杖にて打擲てひきゆきて河原にいたり。一疋づゝ口に小石を突篭石子詰にして五疋ともに殺しとりけるが。わが怪ずる五疋の犬の胸のあたりより。炎乃玉一つばく飛出て虚空にのぼり合して一団となり。何方ともなく飛さりぬ。洞九郎ハ是を見て怪しとハおもひけれど。さすがに心にもかけず。死したる犬どもを穢多乃家に持ゆき。銭二索子にかへて近きわたりの酒屋にゆき酒肴をもとめてところげに打飲。かる酔の機嫌にて家に皈り。香晒ハ富村に放て皈る道にて仲間の猪戸に出會。酒をふるまわれて皈りしといひけり。唯そら〳〵ともふえてぞ居たりける。おのれ

石子詰の罪科をのがれ。いまだ半月も過ざるに。ひさしく飼馴たる犬どもを石子詰となし。絶の酒にかゆる。真誠是性悪の愚夫なり。豈そのむくいなからんや。此犬どもの怨念よりて。後来の戒となるべき話柄を惹出ぬ。かくまでしりのちハ物語べき事もなく打過けるが。香晒ハ已に開胎にいたり。恙なく男子を安産して限なく喜びぬ。洞九郎始の程ハ殺生をする活業をもやむべくもおもひけるが。犬を殺して売しより。兎角仕馴たる猪戸の業にちくなしと思ひ。折々弓箭をかくし持出て山にゆき獣を射て酒にかへ。彦惣香晒等にハ山寺に詣て説法きくといつはりし。念珠をもち来りて家にあるときハこれをつまぐり。そら念仏をとなへけるにぞ。彦惣香晒等ハ志わるたまりて後世をねがふ事よとおもひて喜びけるが。これハ洞九郎が謀計にて。彦惣が病漸く快氣にかもむく様子なきハ。いよくさわらバ死理いひかけ。難癖つけて追出し。香晒に金多く持たる聟とせる。

夫得心せざる遊女を賣つかはして。おのくの金をせだやとそゝのふ。二人ともに志わ〳〵まりしを見せて。油斷さるべきさくみあり。かゝる愚夫をも奸智ハ出やすきものを知るぬ○爰に又都鴨川のほとりに。鴨川兵衛忠知とて富饒なる武士ありしが。いまゞ若年なれども。聰明伶俐雋実柔和にして。文学武藝をたしなみ。けて弓射こゝろ妙を得たり。曾一休禪師と親交て。教外別傳の禪味を甘し。茶の湯の侘を好て其道も又奥をきわめ。常に古器を愛玩し。そぐく風雅なる丈人に越たり。此ところハいまさ俳諧の連歌たゝのの玄人をもられざる時なりるが

向炭や燒ぬむらしの雲の林

とゝふ句を口ずさみなるゝ。時の人白炭の忠知と異名しり。此人の家士に穗波垣右衛門とゝふ者ありし。年ハ五十歳ばかりにて。生得老実なる者なりけるが。一日忠知此垣右衛門を召ていひけるハ。其方にハ仕るべきあり。別儀なわるゝぞ。我ゝ〳〵て懇望せる。更級肩衝の茶入頃日賣物に出。摂州天王子村の茶器を商何某とゝふ者の方にわるはしと告る者あり。彼茶入ハ信濃國望月の家の名器なるが。家士に仕へしたるを其ゆゑの浪人しゝつきにこまりて賣はるよし。出所もしれざれば。我これを索まくゝよなり。これを目巧して索来らんゆゑ。汝ゝ〳〵ゆゑに此ものを仕るべし。價ハ小判七十両のゝ。此金を持て急摂州に赴き。他へ賣つかはさるべし。



とくりゝゝゝ飯るべゝといひて。蜀紅錦の紋ある唐革の剤符を小判七十両を入て垣右衛門に渡しゝれば垣右衛門いかんと受取やがて旅支度をして津の國をさして急ぎゆくなり○夫は洞九郎が家もかゝる病人となりて産婦彦惣ぜきいる色は赤子の色乃泣まぜて。熱乃匂ひの古夜著は臭気る湿布薬病苦は貧苦ともてもも肌は薄き單衣藥土瓶は欠茶碗破障子のさてつけも。歪みるくしあり。洞九郎一日香晒が傍ちくよりて。念珠をつまぐりて。さも理げはいひるる。婿どく病やゝく快気は赴容体あるゝ。てにて看病おろそかにもれば病原はいりて再快気をとりもどしゝ大事の憂あり。然はそもそも産後も余程日数ならでも漸々は乳わるて孩児を養ふとぞ。りゝひ乳をるも村里とく心にまかせざれば。かくて餘死支必定あり。我いとをしとおもふ孫の目前餘死をみんこといとをも

恐がるくもみにつきて。そもそも一つの談合あり。昨日孫を懐よして東村は富りゝひ乳して居るに摂州の人居合せていのるへ。住吉のあらは何某とて富る郷士あるが其妻女頃日男子を産こゝの外喜びるに其子七夜もさるに死亡れば夫婦限りあく悲き妻女は懐さしく乳のまるれつけて。あれ更はちひをもして夜も泣わゝし。せめて人の子をもらひ失し子とひて。此乳をもうえ育くもらば。若さある者わらば。さく告知せよとこのまれるぶ。もん才の懐なるも男子のはし乳はこまりて飢させんとろい。彼所へ養子につるを心いるるやうとれば其子の為ふい大なる福わて。忽錦は包也数多の人にかゝづれ輦はのるに育らるくなり。其心わゝば我ありぶちしてつるをゝゝことをあぬ。これにつるて我ふぶ孫を彼所へつるへゝ。そのさ才一つにあるて壻どく看病せゞ夫の病も本復し。子も飢をたそうて二つあゝゝ全を得良計あるとそよあるこの心い

いふぞやといへに香晒ハ子と懐よ抱あげ。涙をぱらぱらと落して。そぞぐく我身なげ。因果のあしさハ去よあしじ。たまくやどりし孩児を。胎内ゟ失ん。おりひし難義ハ一つのうさなり。あれ乳ひをして養ふうぞ。飢がらあく痩かをゝ成るにつけても彦惣どの原の才あるべ乳侍の抱守のと。何不足もあるまじきよ。あしき時ハ生ま合せ。不運の子やと愚痴よそうをやひるれと。父ゝ人のあがしのよ所きゝて理ゆいそぐまども彦惣どの親の血筋をたやさじと大変よあがをゝ孩児なれば手ぞあをゝハうがさしとひてらけぐらに成べ洞九郎まぎと打ちかまてるさゝをふし。我ハ唯壔どく病と孫めが飢をとくゝるをおりゝ。一途の料簡のみ人手に渡ゝ成ぬ理ゆう。わるがちにとゝハせあといひて頭をおさえて居るに彦惣ハ病床よてこれどゝの屋風押わけ膝行出て香晒よむうひく。ひけゝ。我つゝくゝゝとに其子胎内ゆて危難よわひ出生して又飢るゆくく

親の手ゆて育がゝ因縁の子なべ。翼とおく今の物語。任吉の何某とゆ。富とまざるにかいら祝ぐ。郷士とあまべこのまゝに慶ゆう。ゝひきりて其慶養子よゆるがよゆくべしといひれば香晒ハとゆせまじかくやをべきとなゆうして。ちぐゝそもせざりしぶ。いろふちのてゝを乳不足ゆて。とてゝを養育ゆうがゝとゝゝみぐ。ゆうく心をさぐゆ。得心のゝ式いひれば。洞九郎ハ心の裏よ笑をゆこ。ちゝバ一刻もてやく孫をたづさへて津の國ふゆに彼人よゆだち成ゆうべゝとひて。いそぐゝく湯漬かど打喰才よ成ゝてゝぐゝとゝふ香晒ハちひきうゝきうゆう。大難をまぬれて産出ゝたるいとゝ子を人手に渡を悲ゝい。懐よ抱ゆて。ひさとゝ涙よむせゝう。四子よ男を祖山の鳥をかくやと彦惣ゆ袖をゆがべ洞九郎も手巾ゆ目をゝうゆぐてゝう泣ゝ。ゝうゝ。かぬゝハうゝなれど親子不通とゝふぐゆゝ。ゝうぐでも逢よゆうをゆいぐ此みの

世の門出をくとゝ入てあるこゝとゝなれといひつ。香曙が懐より手をさし
れ子を抱とりて。おのゝ懐よりおもゝ入外の方に立出柴小屋よりある藁嬉
をたづさへて出あれる。跡ハ香曙悶然と。あいさ懐ふさゞもせど彦惣も
手をこゑぬれ夫婦のいとゞ〜て。唯こゞるゝ涙ゝ。洞九郎ハ娘を金よりもる
にハまゞ足手纏の赤子を捨るにもゝ〜とゝふゝ。かく二人の者を欺きて
家を出程遠き夏よ捨なゝとゝひ道を急ぎ夜に入て。津の國よ到り。
合法が辻ふて往来のたえまなく人合せ赤子を藁嬉よりて閻魔堂の前
よ捨おれ。かゝらなやと十歩なり歩こるに何ゝあらん足ハまゝひつるれば。
やがてこれをとゝめげるに革の金剛待にて足にまとひつゝ赤緒の足ゝ。
いとぐ〜くひゝれるゝ小判あまたゝめりゝれば。ゝゝとゝるかゞ嬉〜〜て。
懐よりおゝ入て足速よ此処を立去り。歩こるゝ懐乃裏よて金たかゝるよ。

其数七十両ゝるゝ益喜び今日ハいゝる吉日ぞや。邪魔よゝる子を捨てゝる
大金を拾ひ〜夏例をくゝれ福ゝをひて。満面よ笑をゝみゝゝ金ゝ気よ
ゝりて突袖し。緩々と歩てゞ飯ゝる。俳諧師其角の狂歌よ子と捨てもゝく
かゝる親の子の金をひゝゝゝ命〜かゝまゝとゝ〜ゝ支ゝりて。洞九郎ハ誠
是恩愛をもゝぎる貪夫ゝりゝ。彼穂波垣右衛門ハ君命ゝりて撰刈よ
来ゝ。茶入をゝりゝゝやと天王子村ハ急ぎゆく途中ゝて懐中の金剛待と
落しゝるゝゝぞ。大よ仰天し。今来し道よ立ゝり。提灯をてゝ〜。
四五町が間を幾度ゝゝゝゝゝゝて尋ゝれどゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
往来の人よ拾ゝ〜と力を落し。かゝらんと祈体疲て合法が辻の地上よ撲地
座し。我小禄の子分ゝゝゝゝゝ。七十両ゝゝ大金を償ハゝゝゝ手段ゝ〜。
いふをゝきと當惑し。手をこゑぬゝき吐息して居ゝりるよ。閻魔堂乃

山蛭の洞九郎
狗犬と石子
詰ふして殺せ
犬の怨念
一国の
炎わとうびさる
山蛭の洞九郎
子と捨て金と拾
金と失ひて
子とひらふ
ところ
穂波垣右衛門

茶臼山
一心寺
賽銭
摂州天王寺郷
合法辻
焔魔堂

あらうかて頬よ赤子の泣色すえるかぞ立上り。彼所よりあて見るに墓籠の内よ赤子とりて捨あるぬ此垣右衛門ゞ妻項日男子を産其子程ゝ死失て愁傷ゆるゝあれば巳ゞ才にちひそ〳〵べ。いと不便よおもひ翌の下よ子をかくして我才を射らゝ狩場の雉子親い空ふて血の涙を子故よあゝを善知鳥おゝそいさと〳〵いけるあ。子とちくぬいよるれごゞ。よく〳〵貪苦よせまゝ〳〵ゆゑ是非ゆく捨〳〵ゆるゝめと。其親の心とちひそて。おがえど涙をおと〳〵けるゞ。吁我身よ難義をおひゆゞ。餘所のわゝれよ。ゆくるい益ゆゝ。一且ゝと立去りて。一思案〳〵て見ゆやとちい十歩計歩ゝるに彼捨子又頬よ泣るにぞ。さても不便と立戻り提灯をはつけそ。〳〵〳〵れば男子にて。痩子あれどゝ目鼻ぶちけぶゝに生まつき繡箔の古邪と集て縫ゝつぶ〳〵の産衣を着せゆゝぬとば賤ゝ者の子とも

おがえど。おのゝ難義の時ゆゝどゝ。ひろひ飯りて妻の乳ゆて育でゝよ。家身一ツさ〳〵いゝふなるべきゆゝん。えゝうゞゆゝゝゝ折ゆゝとゞ。さもゆゝゞゝとちひるゝ。生まて餘程日数ゝちゝる子とよえて。捨子い垣右衛つゞ顔をよそ。莞爾〳〵ゝちひるゝゆゞ。いとゞ不便さまゝんゞもせんゝとゆゝ。よ捨ゝくまゝ十歩だゝ歩ゝるに又頬よ泣るにぞ。さても不便とまゝたちゝどんゞ。泣止て。莞爾とゝゝちひけ。ゆけば泣出し。ゝどんいゝゝ。後髪をむゝをゞゝ。ゆゝさつゞゝつ去う祝て。緊管強盗入の家よ恐入小児の笑顔を愛〳〵て。おがえどひゆゝゝ。捕まゝ〳〵と寄にるゞ。いゝさま小児の笑顔かどゆいゝ〳〵に。ゆのいゆゝ。此夜風よ冷ゝる肌を。せめて志だ〳〵のうちを煙て中ゞ〳〵と抱き上懐よ入て我肌ゆてゆゝ〳〵むまゞ。さゆうまゝ〳〵げゆゝゝゝつゝ乳を嘗ゆいゝ〳〵。時刻ゝうまゞ取出さんとゝるに。懐のうちゆてゝゝよげよ。

をやくと祈るにぞ。さてもくかいやさよ。たゞ家金を落せし越度ふて。翌日命をめさるゝとも。かくまで我を慕子を。いづくゝ見捨て飯べき。よく〳〵我と因縁のある子なるべし。のがれや夜更て人の往来もうすかれば大あどふ喰まんハ必定なり。いろにちいゝしても不便なり。此侭ひろひ立飯ま。我ハ命におうぶとも。妻に与て艱育といさまべし。と心とさだめ。子を懐まして此所を立去此夜ハ旅宿をかりて宿。りゝ乳してのゐせなどし。翌日未明ゆ発足して京都ゆ飯り。彼子を抱きかゝゝ打ちれて。主人忠知の面前ゆ出て頭をれ。金をおとせしゝ子を拾ひしまでの事とゆさうふきこえわげて。いろる罪にもあゝせつけれらどさるべしとて平伏してぞ居うろる。忠知ときていひるハ。汝ハ平生老実なる者なれば。さらゝ詞いつうちゝちゝれども。金とおとせし越度と其侭にさしあたて。後日の改道さるべ。永の暇をつゝをり。その子いゝ汝ゆ授し者なれバ養育いさしつゝをべし。若後日おとせし金を償ば飯参うさべき事もあらん。れ金を惜にわるゝぞ。政道をたゞちせんうめなるとゝいゝ法されけるにぞ。垣右衛門いおそれ入たゝ命をめさるとゝ。せんうるゆ。何度ゆくいゝゆなまるるゆ。廣大のおん慈悲なり。後日いろにもして金をそのく。飯参と願ひゝとべしとゝ。主従の別を惜落涙して私宅ゆ飯り。妻秋草ちゝふゝ始終の事を委く語り。いそぐ〳〵く家財と取るさつけ。彼子を妻に抱き夫婦連立て。住馴る家とをれ。ちゝく且伏見ゆ迯ゆ借家して日とおくるゆ。忠知再又別人に金と持せて。摂州天王子ゆ飯りれべいと本意なくぞちれる。つゝしるに彼茶入いゝゆ他の方へ賣つゝうりて。手とむるりして飯りれべいと本意なくぞちれる。

得失譬喩品第二

後談

夫れ扨も洞九郎が其夜拾ひし金を懐ふして飯る道をぐるぐるたべけるを。あやうく速飯て。二人の者の疑んこともあるべくれば。ちぐらく途中さひ及ぶて時刻をうつして飯らぐやとちひ。酒売家ゑ立寄ふづひ銭を尽て酒を飲道をかへて二上が嶽の山道ゑさしかゝる。漸く醉を発し。浪く蹌くと歩をゆたるが。窩峠の古社の縁先ゑ尻うけてやちひ。又彼育待を取いぢし。月影ふて幾度も金とかぞへて打笑ひさちう喜びて獨言ゑいへけるへ。足手まとひの子と捨て手にざにれるゆもうた大金を拾ひしい。ゆへちぐも例あた福あり。此うへゑ婚を追出し娘を賣ば百金へちうう。都合をれば百七十両の金へ我手ふ握しも同然あり。わか嬉やはじけうやといひて。天を拜し地を拜して益喜びるが。ちや栄耀のちろいぞうて。

枕さる樣の上ゑ臂枕して寐をぐう。だちうる色して山歌をうひて。やちみ居けるが。醉ゑ楽じて睡を催し。おがえぞ熟睡し。鼻の色を高くうて。ゆるが。此時をに月へ雲におかれて。ゆの暗くありにう。かてる折しも何者にうあんん崩なる節の間ふう。手をはとさし出して。洞九郎が懐の剤符を奪ひちんとを。洞九郎へ剤符の紐を首ゑひれべ。彼方ゑひびこうさわちうへて睡を醒し。其腕首をむぞと掴べ。振払ひ節を押崩て覆面頭巾ゑ面をつを。大服差をちとうへる大漢わうれ出。又洞九郎が懐ゑ手をかられば。洞九郎身ゑへし。察をる所汝へ山賊のうぐひちん。我を尋常の者とちへ愚さゑ。年をを老てれ。腕ゑおがえのある者ぞ。我懐ゑへ猫の額ゑある物を。嵐の祢ちふに異あうぞと冷笑べ。盗人へことたうひ无益とやちひうん。一言の詞を出さぞ一腰をちうを抜て斬

つゝれば。洞九郎も山刀を抜放てこれとうけるあり。丁々ゝゝと打合て。たべーの間戰しが。双方岩角を足と踏流して。浅き谷川の裏を隔。地橋の杭を取つゝて又六七合打合しが。盗人い岩をとりつきて。のゝ刃をのがれそ。洞九郎もつゞいて其所かのがり。多不烈く打合。双方数ヶ所手と負て。身うち朱を深りるゝ。元来洞九郎ハ力量とぐれ。膽気まされるものゝ。うゝにゝよりき程を酒気とおびて勢盛なれば戰も面倒さやちいうん。刀を捨てむどと組つゝに盗人も刀とそて力とさいの。上をあり下にあして操合しが。つゝに洞九郎さゝのの大男とのけるゝに取おさへ力と取あげそ吭をさゝゝとゝゝれば。一色さけび手足とりがにて死しゝとゝゝ。此時月の雲散て再又耀ぬ洞九郎月の光を常じて。盗人のうちと探見るゝに。是も剤待を首をかけゝ。取あげてゝるゝに。已が山稼を負飯の器をゝとて持馴ゝる布の袋にて。裏とあゝゝるゝれゝ。小判五十両あるにぞ。あおおりひかいどや。嬢香晒が金を奪ゝる盗人い此者にてあゝけるゝ。ゝゝゝど此金乃汞手に戻しゝ。かゝゝ祝ゝの福あゝと大を嬉しゝ。盗人の覆面頭巾を取て面体をゝるに。これ胸毛の黒平にてあゝれば。益驚き。ゝゝど娘が仇を報しゝ。ゝゝゝゝゝと打ゝれば。死骸を此まゝ捨おゝてい後日乃災とゝひて。土中を穿て深く埋。血をそゝゝる土とも取して。莞尓と笑七十両の金を拾ひて。又此五十両我手を戻娘を賣て百両の金を是をゝふまきべ丁ど二百二十両。像の長者あゝゝ。合ハいゝゝる吉日ぞと限ゝく喜ひて。二ツの剤待を首にゝけ。谷川。くゝゝゝゝ刀おゝ の血を洗。ゝゝの所をのゝく来て。一息吻とつきゝる折しも。むゝのゝゝゝの咀道ゝゝ手負熊とおがしゝく。樹根岩稜を飛越て。真一文字を走来る。

和州二上嶽の窟峠ふて山蛭の洞九郎盗人と金とあらそふ

洞九郎手負熊と組合て岩穴よりいる

時に洞九郎ちいろん。彼熊をふちあて。膳を売度を販べ。これも又金に
なる貨物なり。天のたま物とてつどに飽るも費なりと。飽まで欲乃
深れば。古社の関捷を取て岩の陰に身をひそめ。乗来熊を待うけて
近づく呼と前脚をねらひ打倒んとちうるに熊い忽ち
躍せとれを飛越大に怒をし。鼻をとがし。牙をかし。眼をいかし。腰を
ひねり。只一掴と飛かゝる。洞九郎ハうゝ移て熊を捉の手練をさいあたる
者れば。支とせど。再又関木をちうあげて熊の頭をのぞと。微塵に
れと打くふ。熊も又まく是と避。関木ハ志りと喰てさ爪をたゝて。
ふうちをそんとも。洞九郎ハこれをちうきゝと力を尽しきゝく色を
たつれば。熊も勢猛くうるうて。ちべゝ引合るが。熊の力やまさうれん。
つひに関木と奪取已が力ゆうりてのけさまに倒まうる。洞九郎い便機

よしとうひ。手速山刀を抜て突かゝる。月の輪をふさうふさゝとかゝ
れば。さゝうの荒熊四足をちゞめ身をゝる。一色うりて息うえうる。
かゝる折しも夜嵐烈しく吹来りて。樹木の梢ざわ〳〵と鳴どうゝ。月い
ふてび暗ゆうるに怪哉火の玉五つ。何呼ともく飛来り。空中ふて一團
となる。死したる熊の胸りとに落て。消るとひとしく。熊ハ忽穢て。再ま
洞九郎よ飛かゝれば。洞九郎今ハ身体疲て敵しがゝ。逃去んと
ちうるに。熊いたやく飛つゝて。洞九郎が衣服の襟をくゝひとち孫たゝ口
けるにぞ。熊も洞九郎もともに深き岩穴裏におち入。組づわだつ事が。
つひに洞九郎熊を押伏て。ゆか胸さうとゝ刀をゝくさゝとかゝれば。
熊ハ全死しなりうる。彼五つの火の玉ハ洞九郎が為よ石子諸よりし。
五疋の犬の怨念よ疑なし去程よ洞九郎い岩穴よおち入て四辺を見まを。

岩壁屏風をうてまんしゝなるごとくふて。のがるべき便なくんば大なる仰天。
葛藤を取つきて。うちぎりて撲的おち。岩角をよぢのがりて。苔を辷り
て撞飯おち。翅なき身にせんとす。大なつれて倒伏す。殊に身上の疵
いたみて堪がたく。誠に十分の難義なり。かくて時刻うつり。夜も明つる
ほや。岩の間より少しのぼりのさゝるゆゑ。四方をいけめぐりてゐるに。
のがるべき所なくんば。いかゝ驚きまどひ。さて飢にのぞこくんば山刀を
もつて熊の肉を割取て是をくひ。肉の油をとりて身上の疵に塗
つけたるに。やうく其痛いさくんぜも。とくのがるべき便なくんば。大膽
強気の者なれども。さもなき心なるべし。さて熊の肉を食らて飢を
志のぐ。渇をたもつる清水ざになくんば。風の吹こむ木の葉の露を嘗て。
いづれに咽をうるおし。幾日ともなく此穴の裏に居さりける。いかに

ふひめぐりしても。こゝを出べき手段なく。首にかける二つの制符をとる。
うちなる金を取出し。一ツとなして唐華の制符にとゝめ。七十両小五十両
娘に賣バ又百両合て丁度二百二十両とゝ。金は我身に捻もて。穴に
ありてハ金を持るひとなし。こゝをく出きバ侠の長者唯孫がくい
穴をのゝ出さや翅をかしやとおもひて。空をあゝぎ足ぶみして。泣
悲むぞおろかなる。かくて明ることもなく暮ることもなくして四五十日も
こゝにありて。已に嚴冬の時節に到れば。穴の裏ハ格別に寒気つよく
堪がたくんば。熊の皮を刷て身にまとひ寒をふせぐるが。髪ハもじろを
乱し。髭ハ長く生のびて。おのれも熊のごとくにあり。今ハ熊の肉をすべて
食ひ尽して。只骨のみ残りゐるバ。飢をふせぐ。夏ゆゑ。此後いかゝ
命をつなぐべきと。像に又ハてまどひて。何にもあれ食べき物ハなくと。

穴の裏をこまやかさゞしりもあるに。岩の間より見馴ざる菌のありるに。ふぞ。大よ嬉しみ。是を取て食ひけるに。ものぐくありて五臓六腑悩乱。さけちごるが如くにおがえ七轉八倒して苦をるが。つゐにあかくの血を吐出し。首ゆ剤符をうけあゞ。熊の白骨の傍ゆ。ちとさいてゞ死しうるる。彼菌ハ岩芝がいひしごと。獣肉を食合されば忽血を吐く死をといひしゝ詞ゆたがハゞ。誠よ奇妙の菌なり。五雑組ゆ云。僧徳明と云者山よ遊忽奇菌を得て皎り。衆人よ喰しむ毒発して死もるもの十餘人とあるも。かゝる類ゆやあらん。熟〻そよ胸毛黒平い香晒が金を奪ひ〻報よ〻ろて。洞九郎が為ゆ殺る。其金洞九郎が手ゆかゝるとゝども。天罰討洞九郎が貪欲非道を戒て岩穴の図圄よおとゝ入牙よあるさの金をおびあゞ。五界よ出るゆをあさゝめど又香晒ハ孝れるよ

胎内の子を脱せんと菌の汁をのまんとせゝふ。ゆゝて其子い恙なく。洞九郎が飢を志のゞ。命をたもうんとゆふ食ひゝゝ。ゝて其毒よあるうて死ゝたるゆ。善悪邪正其報こまやかゝ天の賞罰正ゝたこと如此。豈怖ざるんや。又五人貪欲非道の金を貯るゝ。たとひば洞九郎が窟中よあるが如く。あるさの金も飢餓をたもくべき料よあらゞ。ゆづりに一滴の水ゆおとまり。悟るべゝ慎べゝ。又洞九郎が穴のうちゆありる始末人乃知べき道理ゆゝとゝども。都是推量をあらそもるせるあり。又胸毛乃黒平が古社の裏よ居るゆえいろにとゆんば先ゞゝて家財を彼社の裏よ運あゝて。ひそかゆ賣代ゆゝ。妻の岩芝とともに。ちぐ〻かれ居るが。彼夜岩芝い麓の村よ一宿ゝて居合せざれば夫の殺きるゆを知ゞ。皎て及れば夫の行方をれざるゆえにせんるるゝ。いづくともあくおち行るるゞ。

○扨彦惣香晒寺夫婦の者ハ幾日をへても洞九郎家に皈らざるといぶかり。人を雇て摂州住吉の郷士何某といふ者と尋させけるにさある人はなしとふわざ益なかり。香晒ハ父といひ子といひ行方しれど生死の程もわからずみれを悲しミ。其出る日と今日とて二人の菩提をとひ涙に日をおくりしが。彦惣が病ハ事なくおこりて。其年の暮に全快しければ是とのミ幸とし。夫婦相談して泉州堺に住家をうつし。彦惣ハ扇の絵をかき香晒ハ扇を折て。とりせだにしるるなぞ。漸くに貧さと忘れるがこうしてるを二年をへて。香晒又懐胎し。此度ハ女子を産其名を小田井と号て育る。

諸迦跋鼇駄尊者

酔菩薩方便品第三

爰に又梅津嘉門景春ハ去比管領由理太夫勝基にまつさひて軍師となり。京都万里小路に宅呼といひとうも日夜勝基の館に到りて。軍慮をめぐらし忠をつくしければ勝基甚尊敬ありけるに嘉門が母みまかりけるにぞ。勝基をりて嘉門に妻をめとらしめ其名を此花といひ。男女三人の子を産ぬ嫡子ハ彦九とて今年十歳次の娘ハ玉虫とて九歳を末の娘ハ三歳になりけるが此女子右の腕に七つの黒痣ありて七揺光破軍星の形に似たれバ其名を七星と呼になり○其比一休和尚ハいまだ年若おハして山城国岩倉山の麓にかたよりある草の庵を結て住あひ。庭前に栢樹を植て祖師西来の意を示し。窓外の桃花と愛して志勤啓悟の跡を慕倚遇が煙房にならひて。一炉の柴に寒夜を志のぐといへども方會が雪屋にひとしく。壁崩雪眼藏につもりぬ。居に所かし。破蒲團に坐てハ恵稜が参禅の辛苦をおもひ古肉案に對てハ盤山が肉肆の発悟を快とし。安国の折箸鹿門の破鍋

まづ厨の用をかをの〻菴中更に一物と貯たまへど唯酒を好みて。檀越の布施物に時い袈裟衣を賣て酒にかえの人。人是を識れへの〻く。往古思大らの和尚三世の諸仏を我一口に呑尽といへり。これを思大呑佛とらん。夫に比べば我袈裟衣と呑いなむ〻ことのみ。後小松院の二の宮ふて。まさしく竹園のかん身なれども。自いれに誇のみ。四姓の人吾門に入べ皆釈氏と称ぜ出家と。去て氏族の尊卑を議する忍べ〻ど。狂雲集にえ〻るはげ〻しき。たゞとくおぼるなり。四大皆空なると看破して。情を詩酒に寄ゆ。顛狂遊戯をなして。霊機を吐くを専とする。素聖者の再来にて。六神通と得ゆいぬれば。現世の吏ハ更なり。過去未来の吏をゝて暁し。ゆへ〻とゝるなり〇夫い扨ゆ又濱名金吾入道由理太夫勝基。

両管領かゝての鉾楯に依て。諸国の列侯二裂に乱れ。濱名方に具負し。勝基方に引分。已に應仁元年二月。双方洛中の東西に分て。合戦〻〻〻〻〻る。嘉門い益勝基をさもけて。さゝく奇計を施し。れば。勝基方大に勝利を得る〻〻。然に勝基方に属しる赤松正乗。秋庭原明摂州鳥井野に於て尾道助夏廣と戦利をくして。〻〻うに三千餘騎に打〻されて。都をさして敗北し。岩倉山に陣を取援兵を乞るゆゑ。勝基梅津嘉門を首将として。五千餘騎の援兵〻〻むけられゆ。時に嘉門つ〻くに〻。我快程天文をかゝ〻。蓍筮と〻〻に。勝基殿の天寿已に尽違かゝ〻〻病を発して逝去むに〻必定〻〻。まるとゝ活竜ゝちまち死蛇とる。雷霆雲をゝるれて地にかつ〻〻如くかゝ〻る播乱の時到ては我〻るかど忠烈をゝげ。精神を尽も。

孤掌鳴ざるの道理ゐてとても妄間无尭の計ハおこゑ〻〻ぐりぐ。楠判官
湊河ゑ打死せしめ。能時を知るゐ。唯勝基殿の生前ゑ英ゑ打死
まて。日来の恩義ゑ報ゑんと思慮をきゐ。今日と名残と切いきりて。
妻此花三人の子ども共ゑ今生の別をゐ。それの軍とゐふ。花ゑふ
よゐて岩倉山の陳ゑいう。正乗原明両将をたもけ。諸軍ゑ指揮して。
奇正虚實九変の術を尽し。種々の奇計を出して戰しめけるて。
夏廣をえじめ濱名方の大軍大ゑ敗走して。死亡の者数をもゝ素
目ざゐ〻〻軍して打死せやと定る夏ふしあれど。自長刀を
打揮て大軍の裏ゑ跳入四角八面ゑ斬てまゐる。敵あまさ打取ゐふ
勢猛くて戰ゐる。此日一休和尚ハ庵中ゑおいして陶酒のゐろ酔ゑ
睡を催し。肱枕して睡ゐる。忽螺鐘大鼓の音大ふひゞく。

鯢波箭叫の音を聞くきこえゐんべ。睡を醒して頭をあげ。寐ぼけ枕屍
風をふしのけて。岩倉山の方と見ゐふ霧のまゝにゐくの旗翻翻と
もて。紅葉とゐふと雲の波山を洗ゞ如くなる。さてハ岩倉山ふ軍ぬきう
ゐるゐふ。蝸牛の角の爭ふ我庵室まゝと修羅のちまるとゐして。睡と
さゐるゐいしん奴原哉宛かしまゐよと。口小言のくまひゐるゐ。
あゐてもこしまゐまゐれを。さゝ又一睡とおだして。ちゐくと目睡ゐ。
又陳鐘大鼓を打ゐしてにゝ。睡ゐふゐあさゝ。盆腹立ゐひく駿てへ
とても我を睡さゝせめて今一盃を酌やと。独謐ゐいて。陶と自在
ふて呈つけ。炉中ゑ柴を折〻べて。駒髏をあゝぶてゝおいしゐる。かゝる
折しも山路ゐう。武者一騎手綱かいゐう。駒の頭を此方ゑむけて歩こゐ。
其装束ゐなれを。紺村濃の直垂ゑ白糸威の鎧の金物重打さと

梅津
嘉門
景春戦
はれて
一休の
庵室ゟ
ゆらい来り
一子彦九を
徒弟と
なすと
戦場ゟ
打死
と

透間もなく著下て青純の大口とをし。長覆輪の太刀を帯。銀の小蛭巻の目貫の螺を透しなる長刀を小脇にかいこみ。鹿毛なる馬の太逞き。遠雁の文を打なる鞍を置燃立たるなる厚総の鞦をかけてぞ乗なりける。身上にはめなる矢を折うけて。枯野の残る冬草の風に靡しなるふ異なるぞ。全体血に染りて白糸威も緋威とはまがるぐらなり。敵とおぼしき雑兵四人後をつけて来りなるが。容易に手を出さぬ水隈に かくれて聞なり。偖彼武者は一休の菴の前にて馬をとゞめ。長刀杖に倭僧て。柴の戸ふ立寄てかこくと打敲ぬ一休は軒前なる金鉄こふなる鎧金物の音に交りて。磬の音の令々と鳴る耳をふぶけて落武者の過るなるめとおぼしくなるが。程なく門を敲ぬぞ。何者ぞやとおぼしき。庭下駄をはいて。飛石づたひに立出るに。柴の扉をひらきたるふ是い

なるて相知なるひる。梅津嘉門景春なれば。こハなるひらけざるなるよ和尚も今日の軍に出立まして。痛手の様子にて戰疲なる体なるとのなるへば。嘉門其応はせぬ。突然と問曰

何是勇士徒麼事

一休老に応じて答曰

吹毛急用不如前

嘉門此一句を聞て打點頭ば。一休則ともなひて庵中に入る。嘉門坐とさざる一息つきていひるハ小子今日しも管領由理太夫の命をうけ。援兵の首将となりて。岩倉山の戰場にむかひ。孤てかりの旨あれど。今日と限りと思ひさだめ。討死ときはめいぬ。師父にたのみ申なる一條のあるにより。一方と斬抜て此所まで落参い其支別儀にはいぬ。

小子が先祖梅津豊前左衛門清景い元享の頃當国梅津邑の領主ふて。月林大幢国師と尊信し。法名と是心と称じ。専禅法と修して。正法眼蔵をきいむ。其故ゑ国師の法語一巻を家ふ傳へ小子もまた禅法を慕志深く。一旦金剛山ゑ跡をかくしたてまつる。由理太夫豪不肖の身と懇望のあるにやむことを得ざ仕へをゐ〳〵空寂乃玄妙を會得するいいこゐゐ。つひふ其志をとげたてまつる。これに依て児子彦丸と出家なし。小子が志をつがせくいゐ。當時師父の道徳天ゑ覆慈悲普して人擧て活仏のごいとゐ〳〵ゆえ。師とさうこゝかをべき人外ゑゐるべしどこゐ孫ぐくい師父彦丸をゐん弟子とゐ〳〵たまひて。微妙の法門を傳へゐんし。これのゝ今生の望ふ陳中物のゝ〳〵ゐも〳〵ふ。これを布施物とおがゐゐ〳〵とそ。帯ゐる太刀をとりくまゐ〳〵れば一休これを受てのまいく。善哉是南泉猫を斬の利刀ゐ。此太刀都て血ふ染りて朱を塗ゐるがごとくゐれば我これを朱太刀と号て常ゑ身辺ゑ置邪禅賊僧の頭を斬の法刀とゐ〳〵て。長和生の遺物とゐ。子息彦丸の夏い望のごとくもべゐれば心安くゐんよとのゝまひけるを。嘉門い今生の望と遂ゐゐも嬉しげいて。氣色涼くぞえてさうける。一休の画像ふ椅子の傍辺ゑ大太刀を画て朱太刀の像とゐ傳ゐゐ。これかくと知もゐ。かくて時刻ゐるをぬもべ嘉門いいるゐ小子い最期をいそぐ。ゐへい。ゐゐ涛暇ゐもゐとそ。一礼して立上り。門外に出るを。一休も門ゐ出て出ゐひ。嘉門が最期の正念を試んとゐおがゐゐ。辞世の一句をゐゐと望ゐゐ。嘉門やぞ詞を出さんもし折し。軒前の雑兵四人木陰ゐゐ〳〵ゐも出て且二人の兵嘉門が左右ゑつと寄て。腰ゑむんづと組ゐ。

嘉門これを受とめもせず

生くるもぬるその曉よ死ぬるもてだ

と上の句をうづうふ吟じ作。長刀をひらりと捨て。二人が鎧の東方よ左右の手をかけ。阿吽の呼吸を拍子として。大地よ撞的投つけうり。殘る二人ハこれと見て。あれ隙もう組つと。脆首掴て捻入し。こうと足下よ踏ぶけて

くれゆよ色ハ秋風ぞふく

と下の句を吟じて。右を投のけ左を蹋入し。長刀を杖よつたてたると白眼くれで四人の兵等ハ其勇気よおそれ身をちぢめてぞ逃さうめ。一休これと見て呵々と打笑。こちらうしく。辞世の歌の殊勝ものハ。げしん今の觀とハ。天晴の英雄かな。こく極楽城よ赴て阿弥陀将軍乃

一休作佛鬼軍ノ意ニ

軍師とあり。九五騎の善薩軍と指揮して。閻王城を攻おとし悪趣の衆生を救めせとのくまくハ嘉門莞尓と打笑其ゆ詞ハ我為よ仏鬼一如の引導あそぐさしかさどけ。こんぐも児子が支。このく上ハと悟道の人も子故ハ。さもぐふ迷ハ闇の梅色こそ見えねね鹿毛の駒衝こそて引しせて馬上の失礼免しくと一礼して。乗んとせしが痛手ゆて。倭僧足を踏ゑめ打乗ける折しも。ゆてび又貝鐘大鼓を乱調よ打立。鯨波とどつとあげて。天地も崩をだうあり。嘉門馬上に長刀を小脇よ引側て。山の方と佐と見て。さてハ味方敗軍とおがえうう。いぞく今一軍して目ハ物見せん。いとぬやもとハ捨て。鐙を鳴して走行よ怪哉空中ゆう。一圏の陰火落下て忽一つの嵐と化し。嘉門が馬の尾よとびつたてこれ。ゆくこれ前年悪呉寺鳥部野よ會合しそ。ハハうしくうる詞をさぐくぞ。

修験者頼豪院が怨念嘉門を亡ぼすべしと。去程に嘉門い。
再又戰場に到濱名方の大軍の眞中に驅入長刀を額に翳して勇誇る
大勢と八方に追散し。蛛手輪違十文字縱横无尽に斬破り。彼に露
此に隱火花を散して戰ぬ聚散離合のありさまは須臾に変化して。
前にある敵とまれば忽焉として後に廻り。飛鳥のおとくに走る。
在所と見さだめるのあさぶれば者共数をつくして。嘉門を一人
戰ふ事深手を負ぬれば今はこれまでなりとあひ作。如意が嶽に
駈上り。物具脱棄岩の上に結跏趺坐し。懷中硯取出して岩の苔を
打拂ひ筆を染再又辞世の頌とて書とる

提持吹毛　截断虚空　大火聚裏　一道清風

と頌句と書終て差添の小太刀を抜腹十文字に掻破り。俯臥に
なりてぞ失せにける。時に一陳の疾風颯と吹来りて。樹木岩石鳴動し。
又彼妖鼠の骸出て嘉門が臓腑を喰ひ尽す。深き怨念のかどこそおそ
れ北しも冬のなれば此日夕暮より大雪降出し。暫時に高く
積て世界一面の白妙とぞなりける。嘉門が妻此花
夫の打死を聞かひて。ひ儲なるゆゑに死懸にも悲くもおぼえて。
泣沈みるが嘉門が詞に我討死をも共に失なんとぞ思へど。何方
いふる所ふも身をなびて。三人の子どもらがゆくをと見てぐ歩し。と
ひ綾しもなれば露のごとくなる我身も消侘て死ることぞ。
唯三人の子ども等と身ちかくもなりて。口に称名目に涙泣ぞ外の
支ぞなれ。かくて翌朝にもなりぬる。濱名方の兵共嘉門が妻子を搦め
とりて入道殿の恩賞にあづかるべしと相議して嘉門が宿所と取まかんば

召仕の男女どもい此騒をおそれて。皆散〳〵に落行ぬ。此花へいそがはしく三歳になる乙星と懐に抱き一袋の沙金と鴉へ大童国師の法悟の巻物と九歳になる娘玉蟲が懐に入させ我身ハ市女笠著て壺折姿に扮し逃出んとするに早敵兵前後の門に。ひし〳〵と寄来れど逃出ん様をうかゝけるに彦九郎ひら〳〵と馬に打乗長刀を打揮て前門に寄る敵兵と追散し。母と此隙にと落行んとすれば此花ハ玉蟲が手をとりて出。彦九郎かゝるゝ。死益の戰して怪我あやまちをかゝ速跡より来るよしいひ残して落行ぬ。かくて四五町打延て跡を顧れば早宿所に故火して一片の煙と焼揚る。昨日までハ世に おゞえいさゝく時めき栄るに今日ハ忽宿所をさへ焼失れて立寄木陰も雨漏てし。水鳥の陸にまどゝるごとくにて。有為轉変ハ世のなゝひとしなみ哀なる事ざなるる。

去程に此花ハ玉虫とともに近江の国に落行んと。如意山の山路にさしかゝるに雪ハ降〳〵降まさりて。満地玉を敷けるとうるゝ道を埋て行方さへもわきまへ。山越の寒風肌を斬ごとくにて手凍足ゆきて。いふ所をしらぬ様なる。彼に倒此に伏てゆくゆくと夢路をたどるごとくにて。やう〳〵青井が谷をもとゞ。千石岩のかたちにたむろくやもうひて息をつく。彦九郎いらに〳〵て来るゆの遅ぞや。〳〵敵に圍まれて捕きいせざるかと。跡も気づひ爰も難義跡に残せる子をもとゝ進もあるゝ退くも跡にハ敵の充満て進退ともに失へ足に蟹に似たり。雪ハ頻りに降かくつて袖打払ふ隙もなく岩に結ぶ氷箸をゝれて剣をさゝまに植並るやうにて刀山剣樹のごとくなり。手の指ハ小鰕の腰のやうに屈りて。赤色づきるさま。紅蓮の衆生に異なるゝ六趣の六花氷の衣の薄太礼雪

八寒地獄の苦しみも。これにハ過じとぞ。雨衣ざにかゝれど雪水ハ衣服を濡し吹雪ハ面を打き法く身うちいらぎ寒気骨ハ透て堪がたけまて。母ハ二人の子をいたゝき子ハ亦母をいたゝふぞ。玉蟲泣色ふていハく母上のう我身ハ少しも寒からず祈ど母うへハさぞ寒らむ。ぢ持病ハおこるぞや気分ハいかにとぐるぞや。せめてこれもして。寒さを凌ぬれ〳〵とて。覆もさゝぬちいさき小袖を脱。母の肩ハ打著せて。其身ハ裸〳〵とふるへ。歯の根さへあハぬ有様をみて。母ハ涙せきあへず。小袖を押返して玉蟲ハ打ちゐ。吁親ゐれバこそ子ゐれバこそ。其様ふしてゐる。妾が様ハ因果なく身ハ何とし〳〵てそのさうか孝行ハ子を儲し〳〵ぞ。糸惜乃家子や。昨日までも管領の軍師と人ハ敬き其妻子ゐる我身まで。栄花をきはめし身ゐれぞと。夜のまに変る此難義。わしに時節ハ生合憂目を見る不便さよと口説くそて。右の袂ハ抱へ法て。つゝゐた顔ハ袖顔を おしぬぐてむせぶて泣ゐるが。涙さへ氷とゐりて。霰さゝ〳〵る如ゐり。悲ハ抱きさるひ星も。寒さに堪ざるゆゑ。いと苦しげに声立て泣ゐ泣ゐくとゆゑり上。乳房と口ハ含ゐれど。乳汁さへのゐどゐ不頻ハ泣ゐ泣ゐ。ぞく襁褓のうちゐり大事ふりけてゐうき風にもあてぬ様と。ゐる雪風ハふゐさゝさせ。母が肌の温気も冷とゐりゐる懐ハ凍て泣もうゐ〳〵でし。糸惜やうゐいやとて。抱ちゐ〳〵悲む色の哀さハ翅の下ハ雛鳥を。ゐてゐうゐて鳴ゐゐも。霜夜の鶴ハ異ゐ〳〵ど。かくて時をぞうつしける。てゐまて有漏路太郎无漏路五郎とふ。兄弟の強盗ゐり。兄太郎ハ今歳九歳ハ到り。弟五郎ハ十六歳ゐてゐ。ぞ前髪ゐり頃日岩倉山ハ重ゐりとき。落人ゐ〳〵馬物の具太刀刀を奪ひ取ぞやと。此山中を徘徊し此折し

木陰ゑ隠れ居て。此花芽が様子と覆玉蟲が美目容のうつくしきを見て。彼と奪取て人商人ゑ賣べゝと。此花が懐ゑも物ありげなれど。いづれにもこの貨物ぞと點頭合て。ぱと走り出無漏路五郎餓る鷹の雀を掴むに玉蟲を捕へて猿畜をゑぬせれば此花ハ大ゑ驚き。其子をいのちにをるぞとのひて取つゝ。有漏路太郎あのもいとゞ力を拔て此花が肩尖を。二三すぢり斬こをれば。あゝやと叫てのけさまになり。山守の小童等がつくるゆや。背後のうしゑ五六尺斗なる雪の達磨のあるに倒寄ば血ゑ染さらとゆどちゝ。達磨の前ゝ。かゝるの時ゑ此花が懐より乙星を撲的落しゝれば乙星ハ色と立て泣叫と。有漏路太郎足ゆりけて谷の裏へ蹋落しぬ此花ハこれを見て。こハ情なや悲やといひて肩尖の疵をおさへ。痛手の苦しさも忘れ谷を見おろして歎るを。無漏路五郎も刀を拔て一太刀斬ばわつと叫て身と悶髻きれて黒髪と。風ゑ乱せしゆりさゝへ緑も深き青柳を時ゆゆめで見るごとく。身上ハ朱ゑ染りて。惟子雪ゑ散交る寒紅梅ゑ異うるぞ苦しき息の下ゝも彦九ハいゝにせしぞ。とく来て我を救うとゝ。右左ゑ侯僧て此子をゝせとゝ。玉蟲ゑ取つけば無漏路五郎丁と斬る谷へ色幼子を取て戻と立寄ば有漏路太郎ゝと斬る彼方此方のうゆり斬七轉八倒身をもぐゝえ。あゝ苦しゆ堪ぐゝゆ。たとゝ我ゝ殺をとも二人の子共ハたをけてゑ。慈悲ぞ情どこんのうと。叫ぶ色さゝ絶ぐゝゑ虚空と掴苦痛の体。二人の賊ハせてら笑いゝかど號ても。ゆ入る耳ゝゝぬ情心で我くゝ。活業のうゝくき欲无益支とゝぞ。鱠の料理を賞翫せよと。さもゆくさげゆうゝぐ罵て。慰半分片手斬ゆゝ幾太刀とゝ

斬るにぞ。朝霧なる血ちぶきたーる。雪の達磨の羽にかゝりて。其半身と紅に染なーる。かくて有馬路太郎此花と踢倒し。足下に踏付け。とゞめの刀をぐつと刺バ。ゆつと叫ぶ此世の名殘。わゝく息い絶ゆる。死漏路五郎立寄て懐を探り見て果して一袋の砂金。ゆゝしく退と奪ひて死骸をバ谷の裏へ踢落しぬ。有漏路太郎ハ玉蟲と小脇に抱き。両人とともに。ゆく〳〵もちまぎれうにぞ。かゞく危うるぬ。やう〳〵驅散して。此山路に馬をもとめるゝ。戰疲て了用とふり乱し。身上ハ雪に濡とゝり。氷とめざるごとく手綱をくりけり。毋うくらづくにぞ。毋うくのうくと叫りて跡を慕て来りる。こゝに麓の方を見あるをバ。敵大勢飛がごとくに追来る雪ハ益降乱もて。雪頽の音礁々と鳴ごとゝみ。敵の叫呼喜に合して。いとをきほくゝる。

已に敵近ぐと寄ゝるれと彦九ハ駒の頭を引入し。長刀を打揮て向ひ合。敵ハ歩立。こゝろさハ馬上踢上る白妙雪ゝり。玉塵を踏ちして大戰ゝる。彦九ハ年ゝ廿に土歳ゝるとも。父の武勇をうけつぎて。膽気烈しく力量ハ殊に。武藝も又普通ゝるぞ。小腕に希有の力業組とちぐ兵の鎧の上巻ゝ胴で中に提げ弓杖五杖ゝ投げ。其人飛礫に當りゝる武者ども。四五人連て谷底へ真倒ゝ落ゝる。此時しも雪巻風ぐと吹。彦九が馬岩に足を蹴て小膝を折て撞的伏るに。歩立にゝる長刀を捨て。太刀にて戰ゝる左の臂に手を負て。血ちぶきゝるとかどぐ〳〵。これも彼雪の達磨に〳〵ゝる手を負ても勢まをく猛ゝれぞ。敵兵ハ辟易し。さても奇異なる童ゝ小天狗の化身ゝや。人間業ゝらをあらじとて敵對かゝるまゝとて。

山賊有漏路太郎死漏路五郎雪中に梅津嘉門が妻と我子と娘と金と

梅津嘉門が子彦丸と力戦して母の敵とちかふ

皆一同に逃失しぬ。彦九も今は大に疲息きれして堪さうなれば雪を含て
咽をうるをし。太刀をさしぬいて雪の達磨と化と見てあるいぶかしや
我血赤い此達磨に以前の血赤と一ツに合し全身纏て
赤き達磨とありたるは心得ざる事なり。同血にあらざんいぞうかくる事の
あるべきやと。母人此呼ひて人手に此達磨に血をそそぎかけ
あらぬやと疑はて。あらぬと見れば母の著る市女笠のあるゆゑ。
扨こそと思ひて胸をでろれたるかと思ひ足のあるを
見て。妹玉蟲も此呼まで来るに疑ふ。とおもひたく雪に流れて
血をあらひ谷の半までくだりて見るに岩の間にそびまろぶ。母の
死骸のあるにぞ。ろくろくいのちと仰天し。肝心もなくなりて唯あきれて
居たりるが良ありて石木の如くに凍をくたる屍を抱さあげ。そも

何奴の仕業ぞ。かく死軀ある事とは思ひもよらぬ。且悲且怒り。拳を握り
歯怒して泣悶るゞ二人の妹はいかにあらしぞと。これも又気づかはしく。母の
懐中の沙金の失るを見れば盗人の呼為なるべし。今一足おそかりしと口惜さよとて。
悲歎の涙をむせぶて。人びとちもあるべるが再又敵追来るとおぢそれて。
麓の方より貝鐘の音鯢波もきこゆれば。いそがしく雪掘払土中を
穿て死骸を埋。松の枝を折て墓とし立原の野よりぬけ来て独言よりい
るは。敵兵又追来とおぢんとう。我戰疲るるふ臂を手を負疵ぐちよ
寒気とやりて痛堪がたれを今は敵をる事なるべし。阿容々々と捕れなば
花ぐき討死して武門の誉を残しぬ。父上の恥辱あり。孫更母人は
人手にかゝるを失ぬ二人の妹が生死さへ知ざれば我が一ツ生ぶるとも
何のかひあるべき。爽に腹切て父母の跡を慕死出三途をとぶらはん

太刀とりひきぬいて。太刀をとり腹揺いざりて。かぶくつきさしてんとしける処よ。
あれもやまるかもたゝくと色うけて。雪の達磨の背後より。蓑笠を著て立
出る人と見れば乃是一休和尚かぞおいしるる。彦丸いうまて相知れんぞ。
こゝろに折節御坊ゆきこえまゐるとをるわりうさよ。不様くの恩にあうて。
切腹とをひきのめゆゝ。こゝ孫くゝい御引導を渉授ぐさを生うといふ。
一休のうゐく。我汝ゆまうこえそかうるべき変あるにより。万里小路の宿所よ
赴かやとまうでゝに早敵兵放火せゝとばゝ引ゝを途中にて噂とはゞ。
汝此山中に落来ゝとのゝにより。跡と慕て来るあり。昨日父嘉門我庵よ
来り。あらぐの宿志を語り。汝と我弟子とをゝ。今生の望を遂しめよと
なりて。再戦場よ引ゝぬ其証いこれありとて。彼布施物よ残ゝたる。
太刀とゝんせぬゝ又のこまゝひるゝ父の討死母の非命よ死ゝるも皆是

過去の宿因なれば。いかんともをべからざる。死して冥路よ迷ふ。生く我
直示人心の法を傳へ。ぐ父母の菩提とらんにもらじ。昔達磨大士嵩山の
少林寺よ寓居して九年面壁の時神光とゝ僧。終夜雪中よ腰と
埋て教をを達磨容易よ教ず。神光我苦行をいとらざる志をあらはさん
為ゆひそるに利刀を取自左臂を断て達磨の前よ置。達磨これをゝそ法の
為ゆ形を忘ゝの所為法を傳べき器量ありと知り。心如墻壁のたゝをを
以て諸佛無上の妙道を傳ふ二祖大師惠可といふ。則此神光が変あり。
汝今左の臂よ手を負此雪の達磨の前ゝて我弟子とゝんゝ変恵可
大師安心得道の趣よ似て。ゝとも深き因縁あり。汝が心いふくとのゝゝ
彦丸大よ喜びて切腹とゝでまう。徒弟とゝんゝ変と乞ゝんで一休のうゐく。
善哉々々。汝ら先祖梅津左衛門清景の法名と是心といひるゝ。汝が

法名と是雲と名づけ与へ給へり。雲の字ハ是我狂雲の一字なりとて。彼嘉門が遺物の朱太刀と拔て彦九が髻を斬ぬ。折しも又見鐘の音魍波。りゑびそくすへくれたゞ。いざ来きとのたまひけり。間道をこたまひて。庵ゑ皈りぬひろ。これより彦九剃髪して一休ゑ参ぶ同庵ゑ住て。坐禅念経の外。他事なりるとゝや。

本朝醉菩提巻之二終